

明らかな答え イーシャ・サーデサイによる再話

何世紀も前、アヨーディヤー王国の大規模な集会の前で、偉大な賢人ヴァシシュタはラーマ神に教えを授けていました。当時 16 歳だったラーマは、アヨーディヤーの皇太子でした。しかし、最近インド各地の聖地を巡礼した後、彼は物質的な人生の目的について落胆していました。彼は、王子としての務めにほとんど興味を失っていました。

王子たちの教師として仕えていた賢人ヴァシシュタは、ラーマと話すために宮廷に招かれていました。皇太子は賢人に、世俗的な存在の本質と、この存在からの解放について多くの質問をしました。ラーマは興味津々だったり、当惑したり、触発されたりして、賢人が彼に教えなければならないことについてもっと理解しようと決意していました。

賢人は、ラーマの質問の一つ一つに忍耐と深い知性をもって答えました。彼の答えは、そこからさらに多くの質問、多くの熟考を促すようなものでした。ラグ王朝の豪華な広間に座り、賢人と若い王子は膨大で多彩な会話を交わし、それはインドで最も有名な教典の一つである『ヨーガ・ヴァシシュタ』に記録されることになるのでした。

今、彼らはこの議論の真っ最中でした。

「おお、ラーマよ」と、賢人は言っていました。「すべての行為を含む、この世のあらゆるものには絶対なる者が浸透していると考えなさい。この知識があれば、あなたは地上の人生の活動に完全に参加することができる。完全に参加しながら、視線は内側に、内なる大いなる自己に、内側の絶対なる者の姿に集中させ続けなさい」

ラーマは賢人の言葉を食い入るように聞くと、眉間にわずかなしわを寄せました。賢人は王子のいぶかしげな表情にほほ笑み、続けました。

「この世界に二元性はない」と、彼は言いました。「一体性だけだ」

「しかし、もしそうなら」と、ラーマは賢人にゆっくりと言いました。「どうして私たちは一人一人がそれぞれのアイデンティティーを持ってここに座っているのでしょうか？ どうしてあなたは『賢人ヴァシシュタ』としてそこに座っているのですか？ 私には分かりません。どうか、あなたが話されているその絶対なる者の姿を私に説明していただけませんか？」

その瞬間、太陽が窓から差し込みました。あらゆるものが黄金の光に照らされました。

賢人は、ラーマを見ました。彼の瞳は柔らかく、そのまなざしは思慮深いものでした。

それから——彼は王子を見続けました。彼は一言も言葉を発しませんでした。広間の中の誰一人、同席していた廷臣たちもでした。静寂が辺りを満たしました。その中では、かすかなハムの音でも聞こえました。

しばらくの間、彼ら、師と弟子、賢人と人間の姿をした神は、そのままでいました。神は——探究者の利益のためにその時も今も——弟子の役割を引き受けていました。時間はそれ自体を解き放ち、一瞬は数分に、数時間に、そして無限の日の出と日の入りへと広がりました。静寂の中の音なきハムの音は、音楽の中に、音なきメロディーの中に広がり、それに同調した者にだけ聞こえました。外の光りは輝き続けていました。内なる光はまばゆく、ほとんど目がくらむほどでした。

とうとう、ラーマは沈黙を破りました。彼は少し動揺しているように見えました。廷臣たちも自分たちの席で動き始めました。

「おお、師よ」と、ラーマは言いました。「なぜ、あなたは何も話さないのですか？ 私が言ったことでしょうか？ あなたのような尊敬されている賢人が、私の質問に答えられないとは考えられません」

ヴァシシュタはもう一度弟子にほほ笑み掛けました。「親愛なるラーマ」と、彼は言いました。「あなたは美しい質問をした。私は、それにふさわしいやり方で答えた。あなたは私に、絶対なる者の姿について、全知全能なる者の本質について説明するよう尋ねた——そして、私はそうしたのだ」



© 2024 SYDA Foundation®. 著作権所有。

これは、グルマーイ・チッドヴィラーサーナンダがシッダ・ヨーガ のサツツァングやシャクティパート・インテンシヴで話した物語の翻案です。『ヨーガ・ヴァシシュタ』の中で語られた賢人ヴァシシュタとラーマ神との間のやり取りから着想を得ています。